

戦争マラリア調査報告書

戦争マラリア担当・小堀環

1. 八重山平和祈念館での現地調査

八月六日と八日に石垣市にある八重山平和祈念館で調査を行った。ここでの調査は、事前調査の確認という形で行う予定だったが、平和祈念館で得たこともいくつかあった。まず、マラリアという病気の感染の仕方が顕微鏡から見た図を通してよくわかったということだった。現在の社会科副読本『結び合う島々』には、マラリアという病気の詳細が載っておらず、そもそもマラリアとは何かがよくわからないという問題点があったが、このような図を通してだととてもわかりやすいと思った。また、ビデオ『石の声』も観賞することができた。アニメーションということで、子供たちが戦争マラリアについて勉強する導入として、このようなものを使ったらいいのではないかと思った。平和祈念館には、当時使用していた生活用品などもあり、当時が身近に感じられたと思う。

2. 南風見での現地調査

八月七日に、西表島の南風見田に忘勿石を調査に行った。確かに識名校長が刻んだ「忘勿石 ハテルマ シキナ」の文字は浸食が激しく、あまりはっきりとはしていなかった。だが、そこには識名校長の想いが込められていて、そのことを思うととても感慨深いものがあった。浜には人の姿がなく、もっと多くの人にこの碑を見てもらいたいと感じた。少しわかりにくい所にこの碑が建っているので、多分戦争マラリアについての知識がないと足を運んで見にくくは少ないと思う。子供たちはもちろん、観光客の人たちにも、戦争マラリアについての事実とこの碑の存在を知ってもらいたいと思う。また、保存会の会長である平田一雄さんに今回話を聞くことができなかった。保存会の活動などについて、引き続き調査をしていきたいと思う。

3. 聞き取り調査の質問項目

今回の戦争マラリアの事前調査で、文献だけではどうしてもわからないことや、直接戦争マラリアの体験者の方々にお聞きしたいことなどをまとめ、質問をさせていただいた。それをまとめようと思う。

1. <疎開地の南風見から波照間島に帰ってきて、マラリア被害が大きくなったのは、食糧不足のためか>

この質問は全部で三人の方にしたが、三人とも食糧不足・栄養不足を第一の理由に挙げた。南風見在住の H さんは、波照間に帰ってきたときに芋を作ったが、すぐには食べられないし、復員してきた人も多くいたので余計に食料が足りなかった、と話してくださった。また、波照間在住の S さんは、食料がないのに加え、帰ってきたときの波照間島の状態がよくなかった（草は伸び、荒れていた）こと、またマラリアに罹っているため井戸があっても汲みにいけず、魚もとることができず、とりあえず動くことができなかったということをおっしゃっていた。やはり、波照間島に帰ってきて、マラリア被害が大きくなったのは、食糧難のための体力・抵抗力の低下が一番の原因といえるだろう。

また、これに関連して、ソテツの詳しい調理の仕方も聞くことができた。ソテツの実はおいしいそうだが、幹の部分はマラリアに罹っているだけに切り倒すのは重労働で、しかもあまりおいしくないとのことだった。ソテツの幹の回りを切り落とし、適当な大きさ切って茅をかぶせて発酵するそう。H さんは、ソテツは十分に発酵させないと中毒になって命にかかわるとおっしゃっていた。

2. <山下軍曹は、敵が上陸した時のために「井戸に毒を入れる」と住民を脅していたようだが、波照間に帰ってきてから井戸は使えたのか>

話を聞いた三人全員、「井戸は使えた」と答えてくださった。波照間在住の U さんは、あれは「単なる山下の脅し」とおっしゃっていた。しかし、さっきも述べたとおり、マラリアに罹っているために井戸に水を汲みに行くことさえ困難で、南風見の H さんの話では、姉が復員してきてマラリアに罹っていなかったのを看病してくれ助かった、とおっしゃっていた。姉がいなかったら死んでいたと思う、とも話してくださった。

3. <戦争マラリアの戦後補償について、個人としての補償は貰うことができていないが、それはどうしてか。また、やはり補償はあったほうがいいのではないか。>

私がこの質問項目を立てたのは、私個人の意見として、沖緒戦時における強制疎開により、戦争マラリアの被害が数多く出たという事実に対し、国家補償が得られないのはやはりおかしいのではないかと思ったからである。また、現在の社会科副読本『結び合う島々』には、戦後補償については一切触れておらず、子供たちは当時の様子は知ることはできても、その後について、犠牲者の遺族の方々は何を求め、国はどのような対応をしたかなど、この教材からは得られる事ができないと思ったからである。子供たちには、戦争時に起こったことが今でも問題として残っていて、決して昔の出来事ではないのだと感じてほしいと思っている。

この質問項目について、現在南風見在住の、当時学生だった H さんは、やはり軍の命令で強制疎開させられ、マラリア犠牲者も多く出たので、戦後補償はあったほうが良いとおっしゃっていた。私が次いで「やはり補償がもらえないというのは、ここで個人に対し補償をしたら、ほかの地域や犠牲者の遺族の方々にも補償をしなくてはならないからではないか」というと、そうだと思うとおっしゃっていた。例えば原爆を落とされた所なんかも国に補償を求めてくるからじゃないか、などともおっしゃっていた。また、波照間在住の S さんは軍の命令だったから（戦後補償を貰ってもいいのではないか）でもかなり前の話だから ・、とおっしゃっていた。

戦後補償については、個人補償がもらえないというのはおかしいとは思っているものの、戦後 60 年近く経っていることなので、難しいと思っていることも事実のようだ。ただ、今回、マラリア犠牲者援護会の篠原会長にお会いすることができず、今現在の活動について調査することはできなかった。引き続き調査をしていきたいと思う。

4. <「戦争の風化」と言われ当時生きていた方が少なくなる中、子供たちに何を伝えたいか。>

私がこの質問項目を取り上げたのは、この調査の目的は『結び合う島々』という社会科の副読本の改訂であり、聞き取りをしたこと、調査でわかったことなどを教材にし、実際竹富町の小学生が使うものであるということから、子供たちは何を学び、何を考えたらいいのかということを確認しておくためである。また、波照間在住の当時代用教員をしていた S さんにも話をお聞きしたが、当時の教育はただただ事国教育で、兵隊のことばかりやった、とおっしゃっており、「教育というものは本当に大事」ということを一緒に話してきたからである。聞き取り調査を行った方はやはり「当時の事実」を伝えたいとおっしゃっていて、特に西表の S さんは、「竹富町史に載せてもらったりしてもあまり出回らないしあまり読まないからねえ。学校の先生なんか（竹富）町史を抜粋して子供たちに読ましたりするのがいいと思う」と話してくださった。沖縄戦と言えば本島の地上戦のことが前面に出がちで、八重山の戦争マラリアについては知られていない部分も多いが、この教材を通して戦争マラリアのことを少しでも知ってもらいたいと思った。

また、聞き取り調査を行った方々は、それぞれ、自分たちが体験した戦争マラリアについて新聞を切り取ったり、竹富町史に書き込みをしたり、文献を調べたり、とても積極的に学ぼうとしておられ、そのように学んだこと・調べたことが上手く次の世代の人たちに伝わるようにしなければいけないと思った。

これらを踏まえ、この戦争マラリアについて調査したことを教材化するときは、念入りに構想を練って良い教材を作りたいと思う。

4. 戦争マラリアの調査をしてみた感想

今回の調査は、予定通りに行かないことがとても多く、事前調査と日程の組み方の重要性を強く感じた調査だった。しかし、毎日の調査の中で出会う人々との交流は難しいながらも楽しく、戦争マラリアについての知識だけではなく、他のこともいろいろと学べた調査期間であったと思う。調査について不十分なところがまだまだたくさんあり、課題も残っているので、これからも調査を続けて行きたいと思う。